

子規と鷗外

和田茂樹……………一

子規の「はてしらずの記」と芭蕉

山岡貴代子……………九

「北羽新報」における霽月・格堂の転和吟

足立修平……………二四

子規會誌

四一號
平成元年
四月

例 会 記 録

十二月例会（第五五〇回）

昭和六十三年十二月十九日（月） 正宗寺本堂

出席二十七名

浦屋薫幹事の司会により開会。

講演「連歌の世界」

子規博学芸員 石丸 耕 一

一月例会（第五五一回）

平成元年一月十九日（木） 道後公民館 出席

六十二名

浦屋幹事司会により開会、金村治三郎副会長あ

いさつにつづいて講演。

講演「ある数奇なる人生——天田愚庵の生涯——」

幹事 越 智 通 敏

終わって新年懇親会を開く。

なお、このたび、幹事風戸始氏の著書「子規・

漱石写真ものがたり」を松山子規会叢書21として

発刊、和田茂樹副会長より紹介があった。

二月例会（第五五二回）

平成元年二月十九日（日） 正宗寺本堂 出席

二十八名

浦屋薫幹事の司会により開会。

講演「霽月と赤木格堂」

幹事 足 立 修 平

子規と鷗外

和田茂樹

子規をめぐる文人群像中、別格の人として森鷗外がいる。鷗外と子規との出会から、その後の風交關係が次第に明らかになったので、子規さんへの報告としてお話ししよう。

(一) 鷗外の母堂談

古賀蔵人さんが「子規居士と鷗外漁史」(「同人」昭和8年9月)において、鷗外母堂談として、次のような挿話を伝えられている。

正岡といふ男はよく来たものだが、面白い男だった。話をしながら体をこすつて垢を出し、それを左の掌にのせて丸薬をこしらへ、右の中指と拇指とではねを作つて庭をめぐけて弾き出したものだ。(「明星」大正12年7月……平野万里)と、平野万里の記事を祖述している。が、その時期は明白でないことである。私は、この話に驚きを覚え、関心を深める因となつていった。

鷗外の長男森於菟も、最近の「文芸春秋」に、団子坂に移る以前、千駄木町五十七番地時代のことだという。この記事は、木下太郎「森鷗外先生に就いて」(「文芸春秋」昭和8年2月)中にあるのだろうか。確かな実証はないが、古賀さんは、この説に

従うとすれば、少くとも二十三年秋から二十五年新春の間に、子規と鷗外との交渉があつたであろう。しかし、子規の明治二十八年の「病牀日誌」から、二人の交友は「柵草紙」時代(1907年8月)にはじまり、「めざまし草」創刊を機縁として親しみを加えたといふ五〇余年も前に推論されている。(注一)

於菟は、明治二十三年十月九日誕生、鷗外はこの月妻赤松氏と離婚し、本郷駒込千駄木町五十七番地に移住(千朶山房)、同二十五年一月三十一日同地二十一番地(団子坂の上)に移住、父母祖母も千住から移る。別に二階を建増して觀潮楼と称している。したがつて、この挿話は母堂が同居した明治二十五年二月以降のことになるであらう。

ところで、碧梧桐は子規の「癖」について次のように弁明している。(「子規の回想」余論「癖」昭和19年6月刊)

鷗外全集に、指や小鼻の垢を丸めては、そこらちうへはちく、如何にも汚らしい癖のあつたやうに書いてあるが、少し仰山なばかりか、人違ひでないかとさへ、我々には思はれる。子規は風呂すきでなく、七日に一度十日に一度といふ位であつたから、無論小ざつぱりしてゐる方ではなかつたが、

まさか人を訪問して其の主人側の鼻先きへ丸薬を散発するなどの、無作法を演じる人ではなかつた。どうでもいゝやうなことはあるが、一応は子規の名誉の爲めに弁護して置きたのである。(下略)

衣物の着方、果物の食べ方など、多少言及してはいるが、「子規には癖らしい癖はなかつた」といつている。

子規が鷗外を訪問した時期については、後述しよう。

(一) 子規の初期鷗外観

明治二十四年八月三日漱石から子規あての書簡によれば、子規は「一丈余の長文」で、漱石の俳道発心についての所見を述べ、俳句数首と木曾旅行の「岐蘇雜詩三十首」を送稿。漱石が鷗外の作品をほめたことに対し、「図らずも大兄の怒りを惹き申訳も無之」と漱石はことわりをいつている。

「鷗外の作」とは、次のいずれであろうか。

「舞姫」(「国民之友」附録、鷗外森林太郎、23年1月3日)

「うたかたの記」(「柵草紙」23年8月25日)

「文づかひ」(「新著百種」24年1月28日)

漱石は二短篇を読み「結構を泰西に得、思想を其学問に得、行文は漢文に胚胎して和俗を混淆したる者」とし、「一種沈鬱奇雅の特色」ありと認めているが、作品は明らかでない。

明治二十四年八月文科大學英文科生漱石の鷗外作品賞賛に対し、国文科生子規はまだ鷗外の価値を認識せず、むしろ無視している状況であつたといえよう。

明治二十六年四月子規は「文界八つあたり」において、明治の小説は「当世書生氣質」にはじまり、「浮雲」「色懺悔」から露伴・箕村をあげ、大阪朝日・東京朝日・国会の三新聞の小説買占策により、逍遙・鷗外・紅葉らの三派以外は、その餌食になつていくといひ、二年後に初めて鷗外の小説家としての位置を確認している。しかし、交友関係に触れた資料はない。

(二) 日清戦争と従軍

昭和五十年一月刊「鷗外全集第三十五巻」に掲載された鷗外の「徂征日記」によつて、子規と鷗外との出会が、明治二十八年五月四日・十日と、初めて明らかになつた。

明治二十七年八月一日清国に対し宣戦布告、鷗外は、同月二十七日中路兵站軍医部長に任命され、朝鮮釜山へ。十月一日第二軍兵站軍医部長。同十六日字品から出征、十一月三日大連から柳樹屯↓旅順口↓柳樹屯と移動。

明治二十八年の動向を対比、月日・記事を略記しよう。

(月日) (鷗外) (子規)

3・17金州へ 4・10字品、海城丸で出港

4・21陸軍軍医監 14柳樹屯上陸、金州へ

5・4「正岡常規来り訪ふ俳諧の事を談す」

夜神保等と歌仙一卷を物す」(「徂征日記」)

5・8(構和なる)

5・10「和親成れりと云ふ報に接す、子規来り別る、几葦らの

歌仙一卷を手書して我に贈る」(「徂征日記」)

5・18大連発

5・22字品に帰還

9・22台北着、乱鎮庄

10・4東京着

10・31軍医学校長

5・15柳樹屯発、佐渡国丸

17船上で略血

23和田岬上陸神戸病院

7・23～8・20須磨保養院

8・24～10・18松山で療養

10・31東京着

右の五月四日と十日の「」内は、鷗外の「徂征日記」中に登場する子規との交友記事である。

二人の出会いは、金州において、鷗外は三月十七日から五月十七日頃の二か月、子規は四月十四日から五月十日の一月足らずの駐屯滞在中のことで、子規としても奇遇といふべきであろう。

「徂征日記」五月四日の条の「正岡常規来り問ふ」は、もし熟知の仲なら、すでに俳人子規として文壇でも知られているので、「正岡子規」と書いたであろう。初対面なので「正岡常規」と書き、「俳諧の事を談ず」とその対談内容を記したし、俳諧への意欲が高まり、夜歌仙一卷を親友と巻いたと思われる。他に歌仙を巻いた例がないだけに、よほど鷗外の創作欲をおおった様子が窺われる。五月十日には「子規来り別る」と併号で記し、「几童らの歌仙一卷」を、戦地でありながら子規は「手書」して鷗外に贈っている。金州に残留し、無聊の日々を送る鷗外を想い、歌仙を巻いたというので、子規も亦鷗外の話に感動して、蕪村一派の几童らの歌仙一卷を書写して贈ったのである。兩人の風交は、この時点で深まっていたと考えてよいであろう。

(四) 後日談―「病床日誌」中の鷗外、柳田国男談中の子規

明治二十八年、鷗外と別れて一か月後、神戸病院に入院した。京都にいた虚子は看病にかけつけ、五月二十七日以後の病状を認めた。その「病床日誌」に鷗外との出会について語っている。

(六月)五日(前略)昼(中略)

刺身一皿粥二杯を喫 大にいちごを食ひ頗る壮快なるおも、ちなり 曰いちごとりとは中々おもしろき名なり 小説にす

れは森鷗外などの好む所か……森に金州にて会ひし話をせしや

余曰未也 患者曰金州の兵站部長は森なりと聞き訪問せし

に兵站部長には非ず軍医部長なりし これより毎日訪問せり

など談話うちつゞく(下略)

西洋いちごの美味に壮快になった子規は、虚子が朝々畑から新鮮ないちごを持って帰る趣に想を馳せ、「莓とり」に着想、小説にするなら、きっと鷗外などの好む題材であろうかと、口をついての発言であった。

五月三十日西洋莓食うて見たいとの子規の言に応じ、「これはど味きものなし」と食欲回復、六月三日虚子は畑からもぎたての莓をもちかえり、子規は鳴雪先生に一句、ついで二句と詠み、翌四日「如何にも甘さうに食ふ」食欲増進に、来神した碧梧桐も安心、その翌五日、生への活力が増したときに思いついた「莓とり」の題材から、鷗外の顔が浮かんだ。

子規は、帰還後、金州で鷗外に会った話を初めてしたのである。「金州の兵站部長は森なりと聞き」の記事は、新聞記者子規とし

ては迂闊というよりも、このときまで親しく往来していなかったと解すべきであろう。第二兵站「軍医部長」と確認し、「これより毎日訪問せり」の一文は注目すべきで、新聞記者と軍医部長との身分上の隔たりや、軍の新聞記者に対する乞食同然の扱いに対する不満を超克し、「俳諧の事を談じ」興じあったので、五月四日から十日の間、毎日のように訪問し、急速に親しい関係になったといえよう。

六月九日には、パインアップル、翌日は鱸鍋と食欲進み、

気分爽快虚子等ノ身上ニツイテ注意ヲ与へ鷗外天外露石等ニツイテ談話其他雑談ヲ試ミ新著ニツイテノ批評等ヲ為ス(虚子等)

と、子規は病状恢復につれ、鷗外らについて話をしている。

次に、鷗外の側からの子規観について、柳田国男の談「正岡子規」がある。(柳田国男・折口信夫・谷川徹三・風巻景次郎の座談会「俳諧と日本文学」中、「俳句研究」第7巻第12号、昭和15年12月)

鷗外さんが支那から帰って来て、非常に寝てゐましたね。

今度の戦争へ行つて、非常に仕合せなのは正岡君と懇意になつたことだ、と言つてゐましたが、間もなく寝てしまつたんで会ふことはなかつた。(下略)

鷗外の談話は、十月四日帰京後、明治二十八年末の間のことであろう。戦争に行つて、正岡君と懇意になつたことは非常に仕合せだつたと寝てゐた。しかし帰還後病臥したため会うことはな

かつた。鷗外は「人を訪ねない人だから、高浜君などが間に立つて往来した」という。

虚子は、『俳句の五十年』(昭和17年12月刊)中の「鷗外との関係」の中で、この間雑誌の柳田国男談で、

子規と鷗外とは、戦地で知り合いになつた(中略)それが事実とすれば、……その関係から子規に紹介して貰つて鷗外を訪ねたのかも知れません。併し戦地で知り合いになつたといふことは信じられません。

その後、虚子は鷗外を屢々訪問し、大学生柳田国男にも会つたという。※印の一文は、戦後再版のさいは削除した。(注2)

鷗外と子規とが、戦地で知合いになつたという事実を、虚子も一度は否定していた。しかし、子規の談話筆記が現存し、鷗外の日記と、鷗外・虚子とも親しい柳田国男談によつて、子規と鷗外との最初の出会いは、明治二十八年五月四日戦塵の収まつたあとで、大津金州城内においてであり、親交の契機となつたといふべきであらう。

子規は、従軍の様様を「陣中日記」(「日本」28・4・28〜7・23、四回)、「従軍紀事」(「日本附録週報」29・1・13〜2・19、七回)などに公表しているが、出会については一切触れていない。第二軍兵站軍医部長と一新聞記者との談話、文学談など、私事に亘るため、遠慮したといふべきであらう。

しかし、戦地での俳諧談は、翌明治二十九年一月三日に鷗外の子規庵訪問となつて実現した。

(五) 明治二十九年一月三日 根岸庵俳句会稿と鷗外

正月三日、子規の根岸庵には、子規門の日本派の連衆が集まり、「発句始」の句会を催した。(注3)

長老の内藤鳴雪・高浜虚子、従軍していた五百木飄亭、従軍記者河東可全、見合いのため松山から帰京した夏目漱石も加わった。第二回の連座から河東碧梧桐、その選句のときから陸軍軍医学校長森林太郎(鷗外)も参加、計八名となり、第三回連座には鷗外も参加した。

第二回連座 席題十四題、鷗外の選句を中心に、虚子の五句句が最高、漱石の高点句をあげておく。(選者名上欄)

天^地規^地 半鐘とならんで高き冬木哉 漱石

地^天規^地 干綱に立つ陽炎の腥き 漱石

天^地規^地 可鷗 稲の香や修覆しかゝる神輿部屋 子規

天^地規^地 可鷗 うつむいて物申したる寒さ哉 碧梧桐

可鷗 碧鷗 寒がらせ玉ふにしきのふとん哉 飄亭

可鷗 鷗 鷹それで岩角高き吹雪哉 虚子

初めて俳句会に参加したと思われる鷗外の選句は、一句選のみ五句もあり、他の選者と選を異にしていた。

なお、漱石の「半鐘」の句は、子規の「ふゆ枯や鏡にうつる雲の影」の句と、半折双幅になっており、道後公園北入口、子規記念博物館の西に、二句一基の句碑として、昭和六十一年十月二十日に建てられた。

第三回連座、席題五題、鳴雪の四点句が最高、鷗外句と選句な

どをあげておく。

天^規規^虚 井戸端の鍋も盥も霰哉 鳴雪

天^規規^虚 秀^規 雪洞に千鳥聞く須磨の内裏哉 子規

天^規規^虚 鳴鷗 夕鳥一羽おくれ時雨けり 子規

天^規規^虚 鳴鷗 おもひきつて出て立つ門の霰哉 鷗外

天^規規^虚 規^秀 雲やけて木枯ある夕鳥 虚子

鷗外の句が、一句選ばれた。二点句で碧梧桐は「天」として選出した。さらに鷗外が「秀」として選んだ句が、三点句で子規の句であった。

「人を訪ねない」鷗外が、何故年頭に子規庵を訪れたのであろうか。前年五月四日から十日の間、連日のように子規は金州城内の軍医部長鷗外を訪ね、俳談を交わしている。しかし、子規は十月末帰京したが、腰痛激しく病臥がちで、鷗外を訪ねたとは思われぬ。

これにつき、虚子の「子規庵句会と鷗外」(「還暦座談会」(一)) 子規が根岸で俳句会をやる時分に、鷗外にも案内して見てはどうかといふと、案内して見ようと手紙を出した。会が半ば進行してゐる時分に鷗外がやって来たことがあります。其時作った鷗外の句は「めざまし草」に出したやうに思ふ。

(「ホトトギス」昭和9・2・1)

子規が、六月五日神戸病院で、金州で鷗外に会った話をした。それを虚子が覚えていて、句会案内を出すように子規にすすめたから、一月三日の句会の第二回選句から参加した。これは虚子の

記憶通りである。しかし、このときの句は「めさまし草」に掲載されなかった。(次の句会稿参照)

本句会は、子規(30歳)をめぐって、鷗外(35歳)・漱石(30歳)・鳴雪(50歳)・飄亭・可全(27歳)・碧梧桐(24歳)・虚子(23歳)ら八名、新進少壮の気鋭あたるべからず、近代俳壇史上空前絶後の句会となった。以後、子規・虚子は鷗外主宰の「めさまし草」に日本俳句を連載、鷗外は、子規・虚子・漱石とも文通するようになるが、この句会がその契機となったといつてよからう。

(六) 「明治二十九年秋」俳句会稿と鷗外

中秋名月は九月二十一日なので、前日の二十日(日)、二十七日十月四日ころの句会か。子規庵に鷗外・鳴雪・虚子・碧梧桐に、鷗外には新顔の日本新聞社員石井露月・福田把栗、文科大学英语科生竹村秋竹(松山三津生)計八名参集、兼題「鐘(秋)」など十題、鷗外句と選句をあげよう。(注4)

鳴秋^地鷗外 腹にひびく夜寒の鐘や法隆寺 子規

秋規碧 野分する夜寺鐘樓に上りゆく 鷗外

虚鷗規 強飯や暮秋人稀に野の小店 碧梧桐

鳴秋 名月の楼に女の声すなり 鷗外

把 水落す音に寐心よき夜哉 鷗外

鷗外の「野分」の句は三点句で子規も選、「日本」29・10・25に、日本派最初の総合句集『新俳句』にも掲載された。

(七) 「めさまし草」をめぐって

「めさまし草」(明治29年1月31日〜35年2月25日、五六冊)

は、鷗外が日清戦争帰還二か月後に創刊。文壇への覚醒剤の意図から鷗外主宰、緑雨・虚子・眉山・紅葉・露伴の協力(巻三)で発行を続けた。一月三日発句始に鷗外と子規との俳交が生まれ、その間の使者を務めていた虚子との関連も生まれ、虚子帰省中もあり、子規の手許で選句して送ることが多かったようである。

巻一から巻二十までと巻三十五に俳句掲載、明治三十年一月「ほととぎす」発行までは、日本派俳句牙城の観があったし、三十一年十月「ホトトギス」東遷前まで続けられた。以下、各巻の発行年月日、季題、句数、人数、俳人名をあげよう。△鷗外▽(新人登場)と枠内に示しておく。

巻	年月日	題	句数	人数	俳人名	別
(一)	29 1 31	冬	10	5	鳴雪 子規 飄亭 碧梧桐	虚子
(二)	29 2 25	春	20	1	虚子	
(三)	29 3 25	神仙体	30	3	漱石 露月 虚子	
(四)	29 4 25	春	12	6	鳴雪 子規 漱石 露月 飄亭 虚子	
(五)	29 5 25	若葉	17	12	(修竹 肋骨 紅緑 把栗 墨水	鼠骨 蒼苔)
(六)	29 6 30	五月雨	30	16	(牛伴 露石 其村)	
(七)	29 7 31	鮎	26	13	(鷗外)	別に(虚子20句)
(八)	29 9 2	草庵	27	17	(歌仙一子規 紅緑 虚子 碧梧桐 肋骨)	
(九)	29 9 30	秋の水	27	17	(鷗外)	(左衛門 西波)
					(歌仙一碧梧桐 子規)	
	29 9 30	蝗螂	30	20	(鷗外)	(紫明 秋竹 瓦全 東雲)

天歩 愚哉

(三) 35 25 一〇終刊

以上、三二冊に子規一派の俳句が掲載されている。

明治二十九年一月鳴雪・子規・碧梧桐・虚子が中核となり、二月三月は虚子編集か、鳴雪の投稿廃止以後は、主として子規・虚子の句を首尾に配し、子規も編集を担当した。

鷗外は、七月から十一月迄五か月二句宛掲載。

新人の登場を、(一)内に一覽、日本派の普及状況を示す一端といえよう。愛媛土着としては、三月に霽月の神仙体、翌年二月極堂、四月に森河北・仙波花叟ら、六月に青木森々・森盲天外、八月宮脇覆村、三十一年五月早稻田の学生内藤世南も加わっている。

明治三十年一月十五日極堂が松山において「ほととぎす」創刊、翌年十月虚子が東京で出版する間の二十号はなお地方誌であった。「めさまし草」の文苑俳句も一応三十一年八月号迄連載。あと三十二年二月虚子の紙鳶・梅各五句の掲載で終わった。

明治二十九年は、日本派俳句は新聞「日本」を中心に、一隅ではあるが「めさまし草」を月刊誌とした観があり、三十年「ほととぎす」は松山で創刊されたが、地方誌で徐々に中央に進出した趣が感ぜられるであろう。

本誌の特色の一は、神仙体俳句と、歌仙の掲載である。

「神仙体」俳句は、子規の「俳句二十四体」に抵抗し試みたといえるであろうか。明治二十九年三月一日、漱石と虚子と誘いあ

(一)	29	10	31	行秋
(二)	29	11	30	枯菊
(三)	29	12	28	雪
(四)	30	1	29	火鉢
(五)	30	2	25	焼野
(六)	30	3	30	蝶
(七)	30	4	28	日永
(八)	30	5	29	織
(九)	30	6	28	蚊柱
(一〇)	30	7	26	心太
(一一)	30	8	26	天の川
(一二)	30	9	30	芒
(一三)	30	10	31	露
(一四)	30	11	30	落葉
(一五)	30	12	30	煤掃
(一六)	31	1	30	千鳥
(一七)	31	2	28	青柳
(一八)	31	4	17	春風
(一九)	31	5	20	燕
(二〇)	31	7	8	荀
(二一)	31	8	19	清水
(二二)	32	2	18	紙鳶・梅

15〓鷗外〓 (露石 繞石 彩雲)

14〓鷗外〓 (露月)

14〓四方太〓

14〓楽天 碧玲瓏〓

17〓極堂〓

14〓三川 秋虎〓

18〓河北 別天楼 初首 俳狂 花叟〓

17〓春風庵 楽天〓

20〓富女 猿人 瀾水 森々 盲天外〓

19〓東洋 竹采 緑 失名〓

21〓左衛門 木罌 覆村〓

17〓碧玲瓏〓

14〓〓

15〓〓

12〓竹湍〓

14〓蛇穴を出る 虚子10句〓

14〓〓 (露葉 世南)

13〓〓

10〓子規10句〓

9〓一五坊 漁村 井村〓

1〓虚子〓

わせ、今出の村上霞月を訪ねて句作し、早速各人十句抜萃して

「めさまし草」に送稿したものである。(注1)

「歌仙」については、子規は「発句は文学なり、連俳は文学に非ず」(「芭蕉雑談」日本26・12・22)と、否定しているにもかかわらず、三年後に「歌仙」を二巻巻いている。その他にも作品があることのみ掲げ、別項に譲る。

次に、本誌発行に関して、鷗外をめぐって、子規・虚子の応答書簡や記事がある。

「めさまし草巻一批評 子規」(日本29・2・3)以後、子規は文学批評を随時書いている。書簡としては、鷗外から子規へ三通、虚子へ三通、子規から鷗外へ十六通(うち一通は全集未収録)、虚子から鷗外へ二通ある。子規からは送句・挿画のこと、三十年後半からは語のことであり、本稿では省略する。

子規と鷗外とは、明治二十八年五月金州での出会を契機とし、同二十九年一月三日発句始に、鳴雪・虚子・碧梧桐らの他に、松山から帰京した漱石も加わり、新文壇発足の基点となった。鷗外は、露伴・紅葉らを糾合し、文壇批判をし、佐々木信綱の和歌、子規一派の俳句を「めさまし草」で連載し、新風鼓吹を実践した。本誌を中心に、子規・鷗外は親密に、その間虚子は連絡し、鷗外と漱石との文通も進められていった。

金州・根岸庵での人間関係が、大きな潮流となつて、新風展開に寄与していったことを銘記すべきであろう。

俳誌「星」本年五月号から続稿、記事の重複の点了承されたい。

なお「めさまし草」については連載の予定。

(注1) 古賀威人 子規居士と鷗外漁史(一)(二)「同人」昭和8

年9月10日

(注2) 宮地伸一 子規と鷗外との出会い(「子規全集12巻月

報 昭和50年10月)

(注3) 和田茂樹 子規と鷗外(俳句会稿)「星」昭和63年6

月号)

(注4) 右 同上 (四)(五)神仙体俳句(同 同63年8

9月)

(昭和六三年第八七回子規忌、五四八回講演要旨を補訂)

(松山子規会副会長)

新 刊

松山子規会叢書 21

子規
漱石
写 真 もの が た り

風戸 始著 A5版 二四六ページ
定価二、〇〇〇円 送料三五〇円

子規の「はてしらずの記」と芭蕉

山岡貴代子

明治二十六年夏のはじめ、正岡子規は、病める身ながら、日毎に松島・象瀧きやうたかへの思いを募らせ、芭蕉の足跡を慕って、七月十九日、みちのくへと旅立ったのであった。

この明治二十六年という年は、子規曰く、「最多く俳句を作った年」で、その数は四千六百三十四句にもなるという。^{注1}特にみちのくの旅があったために多くなったようであるが、子規はそれらの旅中吟について、明治三十五年の「箱祭書屋俳句帖抄上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ」の中で、「前年に實景を俳句にする味を悟つた以來爰に至つて濫作の極みに達したやうである。實景ならば何でも句になると思つたのは間違ひであつたのだ。」と述べ、涼しいという題を結んだ福島近傍の句十三句を挙げ、「後から見ては殆ど取るべき句がない。」と述べている。

この「實景を俳句にする」という立場で作つた子規のみちのくの旅「はて知らずの記」の中には、芭蕉を意識して詠んだと思われる句が数多く見られる。その「はてしらずの記」には次のような部分がある。

二百餘年の昔芭蕉翁のさまよひしあと慕ひ行けばいづこか名所故跡ならざらん。其の足は此の道を踏みけん其目は此の景

をもながめけんと思ふさへたゞ其の代の事のみ忍ばれて俛おもかけは眼の前に彷彿たり。

その人の足あとふめば風薫る

「その人」なる人が芭蕉であることはいうまでもない。

これ程芭蕉を慕っている子規は、その旅において実景を詠みこみながら、「涼し」という句を多く詠み込んでいたのである。もちろんそれは立秋の八月七日までのことであるが、その他にも、旅立ちの際、銭別に、

涼しさの君まつしまぞ目に見ゆる

鶯洲

松島で日本一の涼みせよ

飄亭

などの句も贈られている程であるし、前述の子規の挙げている句が「涼し」ばかりであることも考慮すると、子規にとつての「涼し」には意味があると考えられる。そこで、「涼し」に注目することによって、「はて知らずの記」の後に編まれた『寒山落木』の明治二十六年、「涼し」のみちのく旅行の部分（抹消句を組み入れて）と、「はて知らずの記」の「涼し」の句とを比較してみることが出来る。

凡 例

上段「はてしらずの記」

【 〃 】は、「寒山落木」のみにある句。地名を付す。

() は、「はてしらずの記」にあるが、配列位置を「寒山落木」と異にする句。地名を付す。

はて知らずの記

涼しさをむかしの人の汗のあと (7・20)

夏川や馬つなきたる橋柱 (7・21)

草負ふて背中に涼し朝の露 (7・22)

木下闇あゝら涼しや恐ろしや (7・23) ☆

涼しさを聞けば昔は鬼の家 (7・23) ☆

すゞしさを神と佛の隣同士 (7・23) ☆

御佛に尻向け居れば月すゞし (7・23)

寺に寝る身の尊とさよすゞしさを (7・23)

下段「寒山落木」

☆印は、「寒山落木」と相前後して配列されている句。

△印は、該当句が「寒山落木」で前に配列されている句。

※印は、該当句が「寒山落木」で後に配列されている句。

寒 山 落 木

白河結城氏城趾

すゞしさをむかしの人の汗のあと

すゞしさを聞けば昔は鬼の家

夏川や馬つなきたる橋柱

1. 涼しさをあつさや町の氷みせ

浅香沼

2.ア すゞしさの只水くさき匂ひかな

草負ふて背中にすゞし朝の露

二本松満福寺

イ すゞしさを神と佛の隣同士

黒塚二句

ウ 木下闇あゝら涼しや恐ろしや

エ すゞしさを聞けば昔は鬼の家

満福寺に宿りて二句

オ 御佛に尻向け居れば月涼し

カ 寺に寝る身の尊とさよ涼しさを

3. 迷ふてもく野の涼しさを

郊外

4.キ 月涼し蛙の聲のわきあがる

ク 笛の音の涼しう更くる野道哉

【満福寺】

【福島】

笛の音の涼しう更くる野道かな (7・24)

見下ろせば月に涼しや四千軒 (7・24)

涼しさの昔をかたれ葱摺 (7・25)

釣り橋に離れて涼し雨のあし (7・26)

涼しさや龍ほとばしる家のあひ (7・26)

涼しさや羽生えさうな腋の下 (7・26)

すゞしさは燕のし行く田面かな (7・27)

われは雫旅すゞしかれと祈るなり (7・27)

涼しくもがらすに通る月夜かな (7・28)

(飯島温泉)

(笠島)

涼しさの猶有難き昔しかな (7・29)

涼しさやかもめはなれぬ杭の先 (7・29) ☆

涼しさのこゝを扇のかなめかな (7・29) ☆

(笠島)

すゞしさは燕のし行く田面哉
福嶋公園眺望

ケ 見下ろせば月にすゞしや四千軒
福嶋葱摺の古跡にて二句

コ 涼しさの昔をかたれしのぶすり
うつぶげに涼し河原の左大臣

シ つり橋に離れて涼し雨のあし
十綱の橋

ス すゞしさを龍ほとばしる家のあひ
岩代國湯野村

(飯坂温泉※)

(福島周辺△)

(笠島※)

涼しくもがらすにとほる月夜哉
七月廿六日岩代飯坂温泉にて夢甲の句

涼しさや羽生えさうな腋の下
笠嶋道祖神にて

われはたゞ旅すゞしかれと祈る也
塩釜神社より浦邊をめぐりて

涼しさの猶ありかたき昔かな
離か嶋

涼しさのこゝを扇のかなめかな

涼しさやかもめはなれぬ杭の先

6. 涼しさや湊出て行く真帆片帆 (7・29)
塩釜の浦にて

7. しほ釜は涼しかりしか昔こそ (7・29)
松嶋雑詠 十六句

すゞしさを眼にちらつくや千松嶋

涼しさのはらわたにまで通り鬼(7・29)

【松島】

8. すくしさを大嶋小嶋右左

【松島】

9. すくしきの数は見えけり千松嶋

【松島】

10. すくしさを片帆を真帆に取直し

【松島】

11. すくしさを舟うつり行千松嶋

【松島】

12. くりかへし数へて涼し千松嶋

【松島】

13. 嶋あれは松あり風の音すくし

經の聲かすかに涼し杉木立(7・29)

をさ橋に足のうら吹く風すくし(7・29)

すくしさを島から島へ橋つたひ(7・29)

灯ちらく人影涼し五大堂(7・29)

すくしさをさらに月なき千松嶋(7・29)

すくしさをほめく闇や千松嶋(7・29)

すくしさを魂出たり千松嶋(7・29)

すくしさを裸にしたり坐禪堂(7・30)

涼しさのこゝからも眼にあまりけり(7・30)

涼しさを島かたふきて松一つ(7・30)

【松島】

14. すくしさを大嶋よりも小嶋哉

涼しさを嶋かたふきて松一つ

(紫雲閣※)

(雄島※)

すくしさを魂きたり千まつしま

涼しさのほめく闇や千松嶋

涼しさをさらに月なき千松嶋

(松島五大堂※)

(松島五大堂※)

(松島五大堂※)

(瑞岩寺※)

【松島】

15. すゝしさや嶋あり松あり白帆有り

【松島】

16. すゝしさのはなれぬ名也千松嶋

【松島】

17. 涼しさや名はなくもがなの千松嶋

【松島】

18. 舟からは松家からは嶋すゝし (7・29)

【瑞岩寺】

19. 古寺や門も戸ひらも昔の花

(瑞岩寺)

(松島五大堂)

20. 涼しさの中に家あり五大堂 (7・29)

【松島五大堂】

21. 涼しさや嶋から島へ橋つたひ

【松島五大堂】

22. 涼しさや画にもかゝるゝ五大堂 (7・29)

【松島五大堂】

23. 涼しさや石碑の数も何木立 (7・30)

(松島五大堂)

24. 涼しさを裸にしたり坐禪堂

(松島五大堂)

25. 袖涼し島ちらばつて十八里 (7・30)

【雄島】

26. 涼しさのこゝからも眼にあまりけり

(雄島)

27. 塩釜海中の藻を此あたりにて何と呼ぶやと問へば藻汐

【富山紫雲閣】

28. 草といふとぞ答へける

(富山紫雲閣)

29. すゝしさや海人が言葉も藻汐草

【笠島】

涼しさにうその名所も見て行きぬ (7・30)

のぞく目に一千年の風すゞし (7・30)

涼しさのはてより出たり海の月 (7・31)

野も山もぬれて涼しき夜明かな (8・1)

涼しさを君一人にもどし置 (8・2)

【仙台】

【仙台南山閣】

【仙台南山閣】

涼しさを君一人にもどし置 (8・5)

涼しさを山の下道川つたひ (8・5)

行けばあつしやめれば涼し蟬の聲 (8・5)

馬子歌のはるかに涼し木下道 (8・5)

風涼し瀧のしぶきを吹き送る (8・5)

上下の瀧の中道袖すゞし (8・5)

【作並温泉】

ちろくくと焚火すゞしや山の宿 (8・5)

25.

立ちよれば木の下涼し道祖神

塩かまのほとりにある野田の玉川末の松山などは皆真
の名所にはあらずと聞きて

涼しさにうその名所も見て行きぬ
多賀城の碑を見て

のぞく目に一千年の風涼し
仙台南山閣二句

涼しさのはてより出たり海の月

野も山もぬれて涼しき夜明かな

政宗公廟前
すゞしさを君があたりを去りかぬる

26.

二階からつかむ木末や風涼し
南山閣二句

27.

すゞしさを此山にこの家一つ
との窓を見ても涼しや山の影
槐園に別れて南山閣を辭す

すゞしさを君一人にもどしおく
涼しさを山の下道川つたひ

(作並温泉道)

馬子歌のはるかに涼し木下道

風涼し瀧のしぶきを吹き送る

上下の瀧の中道袖すゞし

29.

作並温泉 四句
涼しさを下に水行く温泉哉
ちろくくと焚火涼しや山の家

涼しさをや行燈うつる夜の山(8・5)

【作並温泉】

30. 窓あけて寐さめ涼しや檐の雲

【作並温泉】

31. 背にうけて朝日すゝしや山の上

【作並温泉】

32. 鳥啼て木を伐る山の奥涼し

【関山越】

33. 廣瀬川細りくゝて山すゝし

雲にぬれて關山越せば袖涼し(8・6)

【関山越】

34. 雲にぬれて關山こせば袖涼し

【関山越】

35. 涼しさをそよぎ出しけり藪の奥(8・6)

【関山越】

36. 關山越に古風なる袴はきし少女を見てよめる
袴はく足もと涼し昔ぶり

涼しさをや羽前をのぞく山の穴(8・6)

【関山越】

37. 涼しさをや羽前をのぞく山の穴
關山越の隧道にて 三句

隧道のはるかに人の影すゝし(8・6)

【関山越】

38. 隧道にうしろから吹く風すゝし

【関山越】

39. 隧道のはるかに人の聲すゝし

涼しさを砕けてちるか龍の玉(8・6)

【関山越】

40. すゝしさを砕けてちるか龍の玉

鴉むれて夕日すゝしき野川かな(8・6)

【関山越】

41. 鴉むれて夕日すゝしき野川哉

涼しさを青田の中の一つ松(8・6)

【関山越】

42. 涼しさを青田の中の一つ松

夕雲にちらりと涼し一つ星(8・6)

【関山越】

43. 夕雲にちらりと涼し一つ星

【橋岡】

44. 火をともし一村涼し山の陰

【橋岡】

45. 涼しさを風鈴一つそよぎけり

【大石田】

46. 風鈴に涼しき風の姿かな

すゞしきの一筋長し最上川(8・7)

【大石田】

41. 風鈴のほのかにすゞし竹の奥

【最上川】

すゞしきの一筋長し最上川

【最上川】

42. すゞしきの真中を下す小舟哉

43. すゞしきや足ぶらさげる水の巾

右の表のアースの句は、前述の『類聚書屋俳句帖抄』上巻につ

いて記した部分で子規が例として挙げているものである。また、

『寒山落木』の中には「はて知らずの記」には記さなかった句が含まれているのであるが、なぜ子規はそれらの句を「はて知らず

の記」から省いたのであろうか。そこで、1〜43の句が、みちのくの旅においてどの地で詠まれたものであるのか、「はて知らず

の記」の記述から、或は、『寒山落木』の注から、相互に判明するものに限り決定づけてみたいと思う。ただし、松島における句

については、場所の移動がないので記載しない。

1. 郡山(7・21)

郡山に宿る。舊天領にして二千餘戸の村市なり。三四の露店氷

を賣れば老幼男女更るぐゝ來りて梭を織るが如し。

2. 郡山・浅香沼(7・22)

(『俳句帖抄』序より)

3. 滴福寺への途上(7・23)

二本松を横ぎりて野に出づれば畦道あちらこちらに別れて山にかゝるに何れの道かと問ふべき家もなし。坂一つこえて人に聞けばさては路に迷はれたり。

4. 福島・信天山麓公園への途上(7・24)

十二日の月澄み渡りて青田を渡る風涼しきに空しく町に帰る心なければ畦道つたひに迷ひ行くも興ある遊びなり。

5. 福島・苜蓿(7・25)

此石につきて土人の言ひ傳へたる面白き話あり。今まは昔河原の左大臣とて世にときめき給ふ大臣ありけり云々。

19. 瑞岩寺(7・29)

瑞岩寺に詣つ。両側の杉林一町許り奥まりて山門あり。苔蒸し

蟲蝕して猶舊觀を存す。

25. 笠島・道祖神(7・27)

野徑四五町を過ぎ岡の上杉暗く生ひこめたる中に一古社あり。名に高き笠島の道祖社なり。

27. 仙台 南山閣 (7・31)

閣は山上にあり川を隔て、青葉山と相對す。

29. 作並温泉 (8・5)

作並温泉に投宿す。家は山の底にありて翠色空間に滴り水聲床下に響く。

30. 作並温泉 (8・6)

(六日に次の歌有り。)

見し夢の名残も涼し檐の端に

雲吹きおこる明方の山

31. 32. 関山越・羽前の國への途上 (8・6)

蟬の聲いつしか耳に遠く一鳥朝日を負ふて山より山に啼きうつ
る樵夫の歌かすかに其奥に聞えたり。

33. 34. 35. 関山越 (8・6)

さすがの廣瀬河細り細りて今はおたぎもも泛べつべき有様なるに云々。

賤しき衣を着けたるが上に細き袴を穿ちたる其さま恰も木曾人の如し。

36. 関山越の隧道 (8・6)

隧道に入れば三伏猶冷かにして陸羽を吹き通す風腋の下に通ひて汗は將に氷らんとして云々。

37. 関山越えての途上 (8・6)

涼風わが背に吹きて下り道更に熱き事を知らず。

38. 39. 榎岡・旅店 (8・6)

いかめしき旅店ながら鐵炮風呂の火の上に自在を懸けて大なるかんす鑊子をつるしたるさまざま鄙びておもしろし。

(六日に次の句あり。)

涼しさや青田の中の一つ松

夕雲にちらりと涼し一つ星

40. 41. 大石田の宿 (8・7)

(七日に次の句有り。)

風鈴の風にちりけり雲の峰

風鈴のちろくと秋の立ちにけり

42. 43. 大石田の宿・最上川 (8・7)

最上川に沿ふたる一村落にして昔より川船の出し場と見えたり。このように省略句は「はて知らずの記」からその配列によつて明確に位置づけられるものばかりで、「癡祭書屋俳句帖抄」上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ」の中で子規が述べている通り、実景を詠んだものとして関連が明確になるのである。

これらの句を含めて全体的に見ると、その句が詠まれた状況には、実景として一つの共通点があることに気が付く。それを「はて知らずの記」から左に記載する。

・月明りに行水をすませて庭前に廣敷をならべ團扇は蚊を逐ふの道具に残して葉柳の風に涼む。杉高うして黒く月低うして青し。

(七・二三)

涼しさやむかしの人の汗のあと

・十二日の月澄み渡りて青田を渡る風涼しきに空しく町に帰る心

なければ畦道づたひに迷ひ行くも興ある遊びなり。(七・二四)

笛の音の涼しう更くる野道かな

・月は大空にありて四方の山峰紗を被りたるが如く福島の町はそれかと許り足下に模糊たり。(七・二四)

見下ろせば月に涼しや四千軒

・窓を開けば十六夜の月澄み渡りて日頃のうさを晴らす折から不圖松島のけしきこそ思ひ出されたれ。心飛び立つ許りにはやりて如何でこの月をあだにはと足は戸の外まで踏み出しながら最早夜深けて終列車の時刻も過ぎたり。(七・二八)

涼しくもがらすに通る月夜かな

・今や月出づらんと眼を見張るもをかし(七・二九)

すゞしきやさらに月なき千松島

・うれしや海の面ほのかに照りて雲の隙に月の影こそ現れんとすなれ。(七・二九)

すゞしさの魂出たり千松島

すゞしさのはのめく闇や千松島

・雨晴れて海天相接するのほとり微光を漏らすものは月なり(七・三一)

・(三一)

涼しさのはてより出たり海の月

このように、涼しさは月を背景に多く詠んでいることに気付くのである。当時の天候を、内閣官報局から発行された明治二十六年の『官報』により示してみる。

月日	地名	時間	気圧	気温	天気	旬数
七・二〇	福島	午後二時	七五八・五	二九・六	曇	一
七・二二	福島	午後二時	七五九・九	三〇・二	晴	一
〃	〃	午後十時	七六一・三	二三・四	快晴	一
七・二二	福島	午前六時	七六二・六	二一・二	曇	二
七・二三	福島	午後二時	七五七・九	三一・七	曇	三
〃	〃	午後十時	七五八・三	二三・二	曇	三
七・二四	福島	午後十時	七五六・八	二六・七	快晴	三
七・二五	福島	午前六時	七五六・九	二三・八	快晴	二
七・二六	福島	午前六時	七六〇・三	一六・三	雨	二
〃	〃	午後二時	七六〇・七	一八・八	曇	一
七・二七	石巻	午後二時	七五五・〇	二〇・八	曇	三
七・二八	石巻	午後十時	七五六・三	一八・二	快晴	一
七・二九	石巻	午後二時	七五七・〇	二五・八	曇	二
〃	〃	午後十時	七五八・四	一九・九	曇	二
七・三〇	石巻	午前六時	七五八・四	一八・八	曇	二
〃	〃	午後二時	七五七・五	二二・九	晴	二
七・三一	石巻	午後二時	七五二・八	二四・九	曇	二
〃	〃	午後十時	七五二・五	二二・〇	曇	一
八・一	石巻	午前六時	七五一・二	二二・八	雨	一
八・二	石巻	午後二時	七五三・一	二四・一	驟雨	一
〃	〃	午後十時	七五六・五	一九・五	曇	一

八・五	山形	午後二時	七五七・〇	三二・六	晴	六
〃	〃	午後十時	七五九・五	二五・六	曇	三
八・六	山形	午前六時	七六〇・七	二三・三	曇	一七
〃	〃	午後二時	七五八・八	三三・六	晴	〃
八・七	山形	午後二時	七五九・一	三三・四	晴	五

これによると、雨の日が非常に少なく、曇の日が多い。句数と温度との間には差がない。「涼し」と天候・温度は関連させて考えることができるとは断定できないかもしれないが、「涼し」の句を詠むにあたり、その根底に月が存在することは確かであり、それは次の句で決定的なものになると言えるであろう。

…窓を開けば十六夜の月澄み渡りて日頃のうさを晴らす折から不圖松島のけしきこそ思ひ出だされたれ。

月に寝ば魂松島に涼みせん

さて、これまで『寒山落木』との比較から「涼し」を捉えてきたが、冒頭で述べたように、みちのくの旅は芭蕉を慕つてのものである以上、「涼し」の句はもちろん、それ以外の句にも芭蕉に對するさまざまな思いが詠み込まれているはずである。そこで、二人の足取りをたどりながら、「はて知らずの記」と『おくのほそ道』の句を比較し、主に二人の接点について考えてみたい。

みちのくの旅において、子規は根岸から、芭蕉は深川の庵から旅に出て以来、二人の足取りが合流する地点は白河の関であるが、そこにたどり着くまでの道順は、芭蕉は徒歩であり、子規は文明

の利器とも言える汽車であった。このことは当然子規に時代の差を感じさせたであろうし、実際「はて知らずの記」の中にも「きこのふ都をたちてけふ此處を越ゆるも思へば汽車は風流の罪人なり」という記述がある。そして、子規は時間の流れを感じながら、しかしそれを事実として捉え、

汽車見るく山をのぼるや青嵐

の句を詠み、芭蕉の

西か東か先早苗にも風の音

芭蕉

の句を意識しながらも、

早苗にも我色黒き日数哉

という芭蕉との違いを素直に表現したのである。同じ白河の中島山麓宅で子規は、

夕顔に昔の小唄あはれなり

と詠んでいるが、これは須賀川における

風流の初やおくの田植うた

芭蕉

を意識してのものであろうが、いささか疑問である。というのは、同年「はて知らずの記」の後に書いた「芭蕉雑談」の中で、「田植うた」を悪句として捉えているからである。しかし、その批評の記述を見ると、「別に難すべき句にもあらねどさりとて面白き節も見えず。風流の初とは暴露に過ぎたらんか。」としているだけで、「田植うた」という句自体に関しては問題意識をもっているのである。また、「はて知らずの記」に、「白河に帰り中島某を訪ふ。此人風流にして關の紅葉を取りて扇などにすかしたり。」

とあることから考えても、ここでは単に中島山麓宅で風流を感じ、場所的にも「田植うた」を詠んだ地に近いということで「小唄」と詠んだものであろう。場所的に同じということでは、福島県の忍ぶの里における

涼しさの音をかたれ菖摺

子規

早苗とる手もとや昔しのお摺

芭蕉

の句を対照させることができる。

また、八月七日大石田の宿において

風鈴の風にちりけり雲の峰

風鈴のちろくくと秋の立ちにけり

八月八日、九日、最上川において

西吹くとかこのいふなりけさの秋

むしろ帆の風に熱さの残りけり

と、連日「風」を踏まえた句を詠んでいるが、これらがすべて最上川において詠まれていることから考えると、

風の香も雨に近し最上川

芭蕉

という新庄での芭蕉の句を意識してのものであると言いつけるであらう。最上川沿いの宿では他に、

ずんくと夏を流すや最上川

という句を詠んでいるが、加藤楸邨氏によると、これは芭蕉の

暑き日を海に入れたり最上川

芭蕉

を踏まえてのものであるという。確かにその通りであるとうなずけるが、子規がこの「ずんくと」の句を詠んだ地である大石田

で、芭蕉は

五月雨をあつめて早し最上川

芭蕉

と詠んでいる。そして、子規はこの句を「芭蕉雑談」で「雄壮豪宕なる句」と言って佳句として取り上げているのである。子規はまさにこの句を思いながら「ずんくと」の句を詠んだのである。

また、八月十日、酒田においても

面白や草鞋はく日の秋の風

という「風」を含む句を詠んでいるが、これは芭蕉の「風」の句よりも、仙台における

あやめ草足に結ん草鞋の緒

芭蕉

という句の意識の方が強いと思う。子規は「十日、下駄を捨て、草鞋を穿」ち、その瞬間、芭蕉が草鞋の緒を足に結ぶ姿が浮かび、それを自分に重ねたはずである。そのような思いがこめられているのではないだろうか。

以上、二人の俳句における接点を述べてきたが、子規のみちのくの旅は芭蕉へのさまざまな思いを含んだもので、ただ単に『おくのほそ道』になぞらえてのものではない。それは、『寒雷』における加藤楸邨氏の「はて知らずの記」の句と芭蕉の句との対照からも言えることである。楸邨氏は次のように対照させている。

(一) 内は筆者に拠るものである。^{注3}

子 規

松島の風に吹かれんひとへ物

武蔵野や青田の風の八百里

涼しさやむかしの人の汗のあと

夕顔に昔の小唄あはれなり

すゞしさを神と佛の隣同志

寺に寝る身の尊さよ涼しさよ

涼しさの昔をかたれ苜蓿

人くずの身は死にもせで夏寒し

松島の闇を見てゐるすゞみかな

すゞしさを裸にしたり坐禪堂

涼しさのこゝからも目にあまりけり

涼しさのはてより出たり海の月

ずんくと夏を流すや最上川

千用干や裸になりて旅衣

龍窟や風ふるひこむ散り松葉

芭 蕉

一つぬいでうしろに負ひぬ衣更へ

(「芭蕉雑談」曰く髷旅の実況を写して一誦三嘆せしむる者)

初秋や海も青田の一みどり

夏草やつはものどもが夢の跡

(「芭蕉雑談」曰く雄壮豪宕なる句
「おくのほそ道」に有り)

晝顔に米搗涼むあはれなり

神垣やかかるところに涅槃像

寺に寝てまこと顔なる月見かな

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

(「おくのほそ道」に有り)

死にもせぬ旅覆の果や秋の暮

星崎の闇を見よとや干鳥

涼しさをわが宿にして寝まるなり

(「おくのほそ道」に有り)

このあたり目に見ゆるものはみな涼し

暑き日を海に入れたり最上川

(「おくのほそ道」に有り)

夏衣いまだ風はとりつくさず

(「芭蕉雑談」曰く格調の変化せる者も多き中に字餘りの句)

清瀧や波に散りこむ青松葉

(「芭蕉雑談」曰く幽玄なる者)

ほろ／＼と谷にこぼるゝいちごかな

何やらの花咲きにけり瓜の皮

箆ふせておけば晝鳴くきりぎりす

骸骨とわれには見えて秋の風

その他、楸邨氏は『日本の詩歌』の注釈において、次の句も対照させることができると述べている。

我はまた山を出羽の初真桑

蜻蛉や追ひつきかぬる下り舟

このように、芭蕉を意識しての句は数多くあるが、芭蕉に対する思いというものは決して敬慕という意味だけではない。みちのくの旅において、芭蕉の句を意識しながらも、芭蕉が行っていない土地や、一句も『おくのほそ道』に入れていない土地で、子規は数多く詠んでおり、また、「芭蕉雑談」において、「芭蕉の俳句は過半悪句駄句を以て埋められ上乘と称すべき者は其何十分の一たる少数に過ぎず。否僅かに可なる者を求むるも寥寥晨星の如し」などという大胆不敵な言を発しながらも、認めるべきところは認め、佳句も多く取り上げているのである。このような論は定期的に考えてもみちのくの旅の頃から頭の中にあっただけでなく、それならば、「はて知らずの記」における芭蕉とのずれは、「芭蕉雑談」論の先駆と言えるのではないだろうか。つまり、芭蕉への対抗意識を「はて知らずの記」の旅で示そうとしたのである。

ほろ／＼と山吹ちるか籠の音
（「芭蕉雑談」曰く幽玄なる者）

何となく何やらゆかし葦草

むざんやな甲の下のきりぎりす

（「おくのほそ道」に有り）

稲妻や顔のところが薄が穂

めづらしや山を出羽の初茄子

蜻蛉やとりつきかぬる草の上

俳句においてもその試みは確かに見られる。例えば、八月五日

に

行けばあつしやめれば涼し蟬の聲

という句があり、これから

閑けさや岩にしみ入蟬の聲

芭蕉

という句が自然に浮かんでくる。これは山形立石寺りゅうせきじにおいて詠まれたものであり、子規の方は作並温泉さなみへ向かう途上での句である。

子規はその後天童・東根と北上していくのであるが、立石寺へは結局行かなかったのである。このような子規の足取りから子規の

芭蕉に対する対抗意識が考えられるが、立石寺でのこの句を子規

は「芭蕉雑談」で「濫雅なる者」として佳句に取り上げ、前述の

句に「蟬の聲」を詠み込んでいるのであるから、これは芭蕉を意識しての句ということになる。つまり、ここにも子規の芭蕉への

敬慕を残しながらのささやかな抵抗が表れているのである。

このように、芭蕉に対するさまざまな思いは、敬慕であり、抵抗でもあったが、子規は芭蕉にはない新しいものを築こうとしたのである。それが具体化されたものが「涼し」であったように思う。子規はみちのくの旅ということで芭蕉を前面に出しながら、「涼し」を以て自分の世界を開いていこうとしたのである。

注1. 『子規全集』巻一解題（和田茂樹）

注2. 加藤楸邨「子規芭蕉の關係の一例―はて知らずの記を中心として―」（『寒雷』十二巻九号（昭和二十六年十一月一日））

注3. 同右

注4. 『日本の詩歌』3（中央公論社）鑑賞・注釈加藤楸邨（昭和四十四年九月十五日）

注5. 和田克司「正岡子規と『はてしらすの記』における秋田」

（『俳星』昭和六十二年一月一日）

（この論文は、和田克司氏の指導と紹介によるものである。）

（特別寄稿）（子規研究家）

（32ページよりつづく）

憂き我を淋しがらせよ閑古鳥

静かさや岩にしみ入る蟬の声

此の有名な芭蕉の二句にも、之等の句を詠む脳中には前述の

鳥啼山更幽

の詩句が頑然とこびりついていたと思ふ。勿論それ以外に斯く詠せしめる動機があつたには違ひないが、根本思想の推測は外れていないと信ずる。兎に角時代の差、生国の差以上の或物が芭蕉の心を支配していたと言へばよからう。と断じている。

昭和八年に入って新報の主筆菊秀陳人（龍象）は子規居士の転和習作を発表し、俳誌「俳星」の主筆岩動炎天も転和吟への傾斜を示しては来たものの、霽月は、近來北羽新報紙上に格堂の転和吟の無きを寂寞に堪えずとし、慢吟十句を格堂に宛て、転和吟を督促している。

霽月の遺品中には、北羽新報は昭和八年三月一日号を以て影を没し、北羽における転和吟又影をひそめた中に、霽月独り南海の涯に転和吟の道を守り通したが、戦後半歳弱乏の中に七十八歳をもって多彩な生涯を終えたのであった。

昭和二十一年霽月の遺族宛に格堂より届いた端書に、

梅散て聞えずなりぬ転和吟

海南に隕おちつる一星 牙え返る

鶴去て俄かに淋し梅の月

弔霽月翁

格堂

とある。この格堂も、昭和二十三年十二月一日霽月に次いで没した。（昭和六十三年十月例会講演）（松山子規会幹事）

「北羽新報」における霽月・格堂の転和吟

足 立 修 平

奥羽の北の涯、能代港で発行される新聞に「北羽新報」というのがあった。その昭和七年八月十四日の三三、四五七号の第一面に、赤木格堂の署名入りで、「吾転和吟」という欄がある。はじめに前書きがあり、「炎天連日、水銀狂騰九十五度に至る。臥榻を緑蔭に移して霽月句集を読む。会心の詩句に触るゝ度びに吾亦轉和吟を試む。爰に録して俳友の一餐を乞ふ。」と、十七の漢詩句について一句ずつをつけている。

去々日千里 茫々天一隅

雲の峰コロンボ近き船路かな

気蒸雲夢澤 波撼岳隅樓

梅雨晴の湖上に白帆見ゆるかな

戸外一峯秀 階前群壑深

明易き月や下界の雲の下

耕釣方自逸 壺觴趣不空

山居して日を忘れけり閑古鳥

林静白日長

林中の閑を占めたりかたつむり

勿云庵中無一物 満窓冷氣分與君

山僧の此蓄へや心太

為人性癖耽佳句 語不驚人死不休

ほととぎす末期の一句痛ましき

江漢思婦客 乾坤一腐儒

書を読みて清貧に処す心太

昔洞庭水 今上岳陽樓

旅人に柱下り来る羽蟻かな

朝飲白夢泉 夕渡明月灣

晚酌にこれもてなさん心太

屋在白雲中 人婦白雲中

碁を崩す音若竹に響きけり

吾心本如月 月亦如吾心

青嵐竹の中行く流れかな

青山化石鶴未帰

白き羽は鶴が落せし泉かな

酔魂忽醒松風起

浪音の枕に通ふ昼寝かな

少年心事劍相知

編笠や十六にして武者修行

歩々清風起

若竹や友を送りて門に立つ

山如太古不知貧

先生に筍飯を食はせけり

俳人村上露月は、その自著露月句集第一巻の転和吟自序に次のように述べている。

数年前偶然の感興より得來りたる予が一種の吟詠あり、仮に之を転和吟と名づく。(中略)余の俳諧生活三十余年、長い夢の様な世界を溯つて見れば其間時に冷熱變化あり。或時は索然として興味を失ひ、俳句も行き語りだすと歎息したこともあつた。其の最も俳句に遠ざかつていた時、一頃漢詩を漫読して此の空虚を填たしてゐたことがあつた。其當時漱石全集の詩集が出て書架に在つたのを読み、忽然故人に再會談笑時を移すの感あり、故人の倂其個性の躍如として出で來るを覚え、耽誦卷を離さざることが幾日も続いたのであつた。而してこの耽誦陶酔の餘、不図何物かの浮び来てやがて舌端に口誦さまるゝものは俳句であつた。而して、其句は何等作意もなく、忽然として天籟の吹き起りし如く、自ら驚き不可思議にも感じたのであつた。此の如きことを屢々繰り返し一種言ふべからざる感興を得て、終には進んで読詩三昧裡より這個天籟を喚起し來ることを努め、詩集中会心の句を摘みて

玩誦し、盛に陶酔的吟詠に耽るに至つたのである。斯くて一時失ひし俳句熱を復活し、漱石句集當時の感興を更に新にし、又一段深甚微妙の感激陶酔三昧裡に転和し、多数の句を得たのであつた。其他良寛禪師、山陽外史等、夫れから夫れと手近の詩集を漁りて転和し近年我句作の大半は此転和吟であるやうになつたのである。這般の吟詠は、先年松山で発行せし「葉桜」に予が選句せし頃毎号掲載せしが、其後洪柿、俳星、芝蘭等に比較的多く寄稿し、ホトトギス、千鳥等にも載せられたこともあつた。

併し餘り広く発表し居らず、後々批評の如きも少数友人より一片揆揆的短評を聞きしのみにて、或は俳諧連歌の和漢の如しと云ひ、畢竟連句付合の趣味より來りしものと云ひ、或は書讀趣味だと云ひ、又或は公案に由る禅の思慮底なりと云ふ。何れも首肯さるゝ一面の適評であり得るが、最も平たく帰納的に云へば、從來季題によりて吟詠せしを、会心の詩句を以て季題に代へて所懐を舒べた吟詠だとも云へるだらう。但詩句の表現する所は季題の如く簡單でなく自ら異る所のあり、要は所謂花鳥諷詠と云つた様な行き方に厭きて、詩中会心の句により作家の感興に共鳴して、自個所懐感興を吟詠するのである。」

以上が露月の言う所の転和吟であるが、露月は、「学問的定義はまだないが、転和吟の名が其表現する内容に最も庶幾きものだとして暫く斯く命名し置く次第である」と言っている。つまり、

「名は何でも好し、要は此吟詠の真味を味ひ妙諦を了せば足る」と結んでゐる。「然しながら此吟詠の真味を味ひ、妙諦を了する」ためには漢詩文の深い造詣がなければならぬことはいうまでもなからう。

さきに触れた赤木格堂は、岡山県出身で明治十二年児島郡小串の生まれ、早くより子規門に入り、俳句のみならず、和歌・漢詩文にも造詣深く、明治の末年には既に霽月との俳交があったようである。その格堂が、秋田県能代発行の「北羽新報」に「吾転和吟」を発表し、「その一」には、「日々午後二時に至れば寒暖計は約せるが如く必ず九十五度に上る。我亦身を緑蔭に転じて読みさしの霽月句集を繙くこと殆んど日課の如し。且読み且味ひ、心まこと洵に楽しければ、臥し乍ら鉛筆を把て餘白に即吟を記入す。即ちここ爰に再び夏季に属するものを録して一巻に供す。吾が目的は固より苦熱を避くるにあり、転和の格に入ると否とは又顧る所にあらざるなり」と記している。今までその同調者なく、些か寂寥を感じていた霽月は、喜んで書を浪花の亀田小蛸に致して「小蛸君凡下、格堂子転和吟を始めしといふことは初耳なり。本人より何の消息もなし。北羽の切抜でも見せて頂き度く候。天下未だ転和吟に共鳴して作を試みしを聞かず。格堂が転和吟を諒解せる第一人者たるは豫て承知し居り、和親帖の跋にも深い同情を舒べて居るが、作あることは云つてなく候」と、予想外の成り行きに霽月は驚きかつ喜んでゐる。続いて「その二」

興盡何所欲 曲肱空堂眠

涼しさの月松の樹にかゝりけり

桔梗聲起処 竹裏是人家

蚊遣火や誰が隠れ住む竹の奥

蕉葉如求雨 青箋向我舒

字を書けと玉解けかゝる芭蕉かな

断磬松間寺 孤燈竹林外

涼しさの灯またくくや竹の中

雲外疎鐘響 不知打幾更

暮に耽る主客蚊遣は消えにけり

閉戸著書多歲月 種松皆作老龍鱗

虫干や折柄いたる松の風

懶揺白羽扇 裸体青林中

緑蔭に渾白き晝寝かな

夜宿峰頂寺 挙手捫星辰

涼しさや廚に寝て見る流れ星

扁舟期曉発

明け易き浪打際の別れかな

巖扉松径々寂寥

此門や鎮ちて幾日の蟬の殻

と轉和し、その後二日には転和を続けて、

男子重意気 不作別離情

満洲へ幾往来や夏羽織

四更山吐月 残夜水明楼

明け易き月一片や水の上

中夜江山静 危楼望北辰

籠城の夜半過ぎにけりほととぎす

眼前千古意 江山一掃舟

宮島や浴衣吹かるゝ舟の中

雷声忽送千峯雨

峯かけて一刷白き夕立かな

飢死真可憂 飽死亦可恥

初麩酒は二合と定めけり

泉以洗吾心 雲以洗我目

茶にも酌みふんどしも洗ふ清水かな

風鈴や客の多弁に答えざる

一笛倚風吹 有声無曲譜

時ありて洩れ来る笛や樹の茂り

一閣納万象 危欄俯渺茫

海見ゆる二階借りたる夏書かな

楼閣荘嚴界 池塘清浄心

聴法に行く道すがら蓮見かな

次で「その三」には

家貧書是業 身老睡為郷

涼しさの紙に跨り揮毫かな

新聞を吹き散らす風や簞

白日但看孤雲眠

物干の禪涼し飄る

萬物得自然 吾生明日絡（子規詩）

牡丹咲きて命旦夕に迫りけり（子規句）

西行不逢佛 東行却逢牛

蚊柱や牛捕えたる村外れ

（中略）

不会風雪会 悠然臥草廬

薰風や吾足洗ふ寛水

三界冗々事如麻

馬占山死にしニュースや雲の峯

禪似談玄妙

禪定の維摩の耳や蟬時雨

区々勞私智 読書未達天

水中の月捉る猿ぞ涼しけれ

上堂先一笑 壁上有我書

虫干や幼き時の吾詩稿

— 夏の部終り —

九月二十七日と二十九日の北羽新聞には、格室は「転和吟に就て」（上）、（下）の一文を載せ、転和吟を評價している。その要点を摘記してみる。

私は久しく俳壇より退いてゐるが、俳友との風交は細々と続け、就中村上雪月老とは最も繁く俳信を交えてゐる。その雪月老が、大正十年頃より、詩句を題とした俳句を、毎信必

らず附記するやうになつた。恐らく一時的感興の産物かと思ふてゐた處、年を経て中絶せざるのみならず、益々其の熱を高めて、遂にはあちこちの俳句雜誌にも発表するやうになつた。私も始めの程は何とも感じなかつたけれども、毎信必ず「転和吟を示さるゝので、其内不知不識の間に共鳴を禁じ得なくなり、門前の小僧が習はぬ経を讀むやうになつたのである。露月老も私を諒解者の第一人と信じてゐたらしい。處が、先年「俳星」(秋田出版の日本派の俳誌で石井露月、島田吾空等が主宰)誌上で題詩の攻撃をやつた時、露月老は吃驚一番、君は陰に自分の転和を痛撃するのではないかと詰問して来た。私は直ちに、それは違ふ、君のは問題外だから、多々益々健吟を続けられ度い、と返信したこともある。其後一昨年、句集を出版しやうと思ふが、先ず第一巻に転和吟を公にしたいが如何、と云つて来た。勿論賛成と愚見を書いて答えた。其の時私は思ふた。成程私なるほどの處へ書いて来た転和吟も随分あることはあるが、三百頁からの大冊をなす程の試作が溜つて居らうとは、実は意外であつた。次で私の批評を巻末に加へたいと頼まれたけれども、身辺多事、遂に今日まで其の意を果さなかつたのは残念千万である。

俳人漢詩を解せず、詩家俳句を知らざるは吾文学二百年來の恨事である。勿論漢詩を俳句に翻訳し、俳句を漢詩に翻訳した例は少くない。俳訳の例を子規先生の句集にもとむれば、

丘陵盡喬木 昭王安在哉

徳川の代は亡びけり夏木立

長安大道連狭斜

大門につきあたりたる柳かな

採菊東籬下 悠然見南山

菊畑南の山は上野なり

の如き、勿論決して凡々たる直訳ではなく、特に老手に俟つべき意識ではあるが、而かも終に翻訳の臭気は蔽ふべからずだ。

邯鄲城南遊俠子 自矜生長邯鄲裏

江戸ッ子は江戸に生れて初鯉

の如きは実に翻案の妙に達し感吟不能措処であるが、是亦畢竟翻訳の域を脱せない。畫に題して畫の説明を贅するが如く、楮表重複の塗抹を感む。

吾露月老は漱石氏の漢詩愛誦中、偶然の感興にひたり、自ら知らざる陶醉的吟咏に味を覚え、爾來会心の詩句を玩誦しては其の感興を吟咏し、其句積りて遂に一卷をなすに至つた。而して之に転和吟の名を冠したのである。然るに自ら提唱した転和なるものについては、何等説明を加へやうともせず、又強いて宣伝をも試みず、独り兀々こつこつとして陶醉に耽り、怡々として三昧にひたつてゐる。唯無數の作例を示して曰く、「固より今の世に共鳴者のあるべき筈なく、唯だ斯くして俳神一如の境地を示せば足る」と。其の俗流に超越して高朗なる風格は実に古の俳哲に接するやうだ。

私は霽月老に代りていふ。

転和吟とは、姑く心を詩句の表現する別天地に遊離し、恍然三昧境に陶醉するの時、一転風に臨みて這裏の情緒を諷詠し来るをいふのである。其の始めこそ会心の詩句を摘みて題とはすれ、暗誦玩味の裏に覚えず陶醉境に入りし時は、既に命題を蟬脱して独立自主の境地に在る訳だ。此処が詩句を翻訳して俳句を成すものとは断然その趣を異にする所以である。

元来翻訳に於ては作者の個性は当然没却されるのであるが、転和に至りては、作者の個性は躍々として發揮する。何故かといへば、翻訳は原作の範圍に狭く拘禁されるに反して、転和は陶醉境に入ると同時に、聯想の翅を思ふまゝに飛躍し得るからである。且つ翻訳は原作の再版であるため、所謂屋上更に屋を架するの弊を免かれぬが、転和に至りては、不即不離の間に綿々たる餘情を繋ぎ、彼此相俟つて妙味豊かなる畫面を表はし、仮令これを分離するも各々独立の作品たるを失はぬ。転和の妙味は実に愛にある。

と。格堂は更に語を継いで云ふ。

「転和吟とは、霽月の提唱にかゝるが、実例は必ずしも霽月に創つたものではない。今一寸思ひ浮べても蕪村の

禁城春色曉蒼々

青柳や吾大君の草か木か

の如きは堂々たる転和の一作例と謂へる。若し仔細に古来の句集を点検したならば、随分多くの転和吟を発見し得るに違

ひない。殊さらに詩句を記載せずとも、其聯想を古人の詩句に得たる俳句は蓋し数ふるにいとまなき程あらう。蕪村の

春水や四條五條の橋の下

は必らずや唐詩選の

天津橋下陽春水 天津橋上繁華子

に着想したに違ひない。又几董の

あるじなき几帳にとまる螢かな

は確かに白楽天の長恨歌中の

夕殿螢飛思悄然

といふ詩句に着想したに違ひない。かくの如き例はどの俳人にも多少あるに違ひない。天明の天才作家召波は、始め漢詩人として一廉の見識を具へて居たが、蕪村の門に入りてより、俗語を用ひて俗を離るゝの法を頓悟し、名吟「春泥集」を残した。是れ畢竟漢詩で長養された胎内より俳句を生んだもので、広き意味の転和吟に外ならぬ。

更に転和吟を広き意味に鼓張して云へば、吾祖龍芭蕉の半世は杜工部の転和を以て終れりといふも過言ではない。

「読霽月句集」第一巻

子太夫は此味知らず瓜茄子

昭和七年十月十六日の北羽新報に、霽月は転和陸放翁の稿を投じて、そのはしがきに、

「自分の転和吟なるものを始めたのは大正九年頃であった。

爾來昭和六年六月までの作品中より自ら撰びて『霽月句集』

第一巻として世に出したのである。其以前より数種の雑誌に發表し、其以後は専ら「日本及日本人」に毎号發表して居るのであるが、嘗て何等の反響もなく只友人等の一片挨拶の贊辞を聞きしのみであつた。

独り我が格堂氏は能く転和の真髓を諒解して我意を強うせしめたのである。頃日子自ら転和吟を試み「北羽」紙上に発表し且つ自分の批評を求めて来た。子の俳句は業に已に世に定評あり、但転和如何と見るに不即不離転じて、而して和せる妙諦久作の老手も如かず、天涯の知己として今更に快哉を叫んだのである。自分は「日本及日本人」に専ら發表することにしてゐるが子の「転和吟に應へて知己に酬ふるを礼として近作数章を「北羽」に寄稿することにしたのである。

「北羽」は吾が五空氏の独壇場懐しき紙面である。願はくば東北の俳壇より転和吟の共鳴を大にし以て天下に批評を希望する次第である。

とし次の五句を示す。

孤鶴自下遼天來

今日の菊吾大君を祝ぎ奉る

江天雨霽秋光老

舷に飛ぶは鱸や月爽か

草書落紙龍蛇走

酒量亦座中の豪や今日の月

遊戯杯觴近百年

晴雨復た眼中になし今日の月

身健心問百慮輕

年々や古き垣根の菊白し

七年十一月二十日の新報には、格堂は新報の主筆近藤龍象に書簡を送り、「南風の不競を嘆じて転和吟の義兵を待つ」といふ格堂の信書を龍象記者が紹介してゐる。

貴命拝承転和吟稿一兩日中にさし上可申候。日々唱和者の出現を鶴首待望いたし居り候へども、未だ一人の義に唱ふるを聞かず、南風不競を嘆ずるのみ。想ふに餘り六つかしく考へ居るならん、必ずしも唐詩人の大物に詩句を求むるの要なし、書生時代に吟誦せし劍舞用の詩にても可なり。暗誦默会せる詩句ならば何でもよし、心に会して諷詠せば可なり。乞ふ貴兄より御試作如何。若し誤りて之を遊戯視せるならば老生更に歎々を惜まず。

霽月の転和吟を讀みて先づ第一に愉快なるは其引用の詞句なり。例へば陸放翁にしても佳句の発見何ぞ必ずしも霽月を俟たん。但だ霽月が引用の用意を見て霽月時々の心境を卜するを得、是れ第一の快事なり。曩日晝紙掲載転和中に彼が引用せる

未肯高眼成老態 却像危座得新詩

を讀めば六十余歳の霽月が尚ほ産業組合の為に東奔西走席暖まるに違なく、その間車上船中転和吟を廃せざるを推察し得べし、誰かifu転和の遊戯に個性頰はれずと。

更に又

鏡中衰鬢難藏老 海内虚名不救貧

の如き実に会心の名句である。老生は曾て高青邱詩醇を読み海内盛名不救貧

の句を見出し独り感歎の餘り友人茅原華山へ此一向を教へてやり、華山は之を屢々其文に利用したことがある。今陸放翁詩中に盛名が虚名となりたる同一句に逢着し感慨無量であると同時に、霽月がこれを引用したる心境に共鳴を禁じ得ないのである。

今日の菊ありし大御代仰きけり

俳句を字ばざる者も亦此句に感激するに違ひない。人間の心に古今東西なし。文学は之を傳ふる道具に過ぎない。陸放翁も霽月も芭蕉も皆一堂に在り。北羽新報の一隅に在り。此衆は王侯も知るを得ず、又快ならずや、転和吟の義兵を待ち設ける次第なり、

十一月十四日雨窓

格堂老生

菊秀詞兄

衆流掃海意 萬國奉君心

一系の天子の国や菊日和

と格堂は結んで転和吟作者の統出を待望している。

後格堂は「吾転和吟」と題して十一月二十三日(十句)、十二

十五日(十句)、二十七日(十句)、十二月三日(十句)、十二月六日(十句)を物して霽月の批評を求めている。次いで八月に

は近藤龍象主筆が、我が転和吟習作発表についてと題する一文あり、曰く。

「わが転和吟習作発表に就いて」など、物々しい物の言い方をするにも及ばぬこと、笑ふ人もあらうが、この愚詠を発表する事は、私にとつて俳僧生活に一のエポックを劃するものであると共に、全日本の俳壇に於ても亦相当の重要性を持つものであらうと自負するがために、敢えて爰に言を為さんとするのである(下略)。

と。そして、霽月が○点を打った句を、

畢竟功名属蛇足

宝刀に砥の粉打ちけり冬籠

古往今來我独新

窓外の寒月水の如きかな

乾坤無家去何去

蒼天やたま〜過ぐる冬の雁

とあげている。

格堂は十二月十日より二十四日まで七度にわたり、「隱居饒舌」と題して俳論を新報に掲げているが、その十日のものは芭蕉と杜甫とを取り上げていて興味深い文章なので御覧頂きたい。

芭蕉の居常最も愛誦したるは西行法師の山家集と唐の杜工部集であつたといふ。私は西行法師の歌に感心し得ないものであるが、芭蕉は其の心境其境遇より最も山家集のセンチメ

ンタルな風爽に共鳴したものであらう。私は嘗て帝室博物館で西行の歌稿を一見したことがあるが、芭蕉は西行の人物崇拜の餘り、其手蹟まで模倣していると思ふた。芭蕉は何故万葉集を愛読しなかつたかと疑ふこともあるが、しかし芭蕉の時代には一般に難読難解の書と見做されてゐたことを思へば、^{あなが}強ち咎むるにも及ばぬ。當時の芭蕉の学殖より想像すれば、寧ろ本朝の万葉集よりも唐詩の方が読みやすく又親しみ易かつたのに違ひない。唐詩の中でも特に沈痛にして莊重な杜甫の詩に共鳴したのは芭蕉の性質より推察して当然なやうに思はれる。惟ふに芭蕉は平常杜甫の詩を暗誦あんじゆ黙もく会かい須しゆ叟そうも忘れなかつた程心服せしに相違ない。若し芭蕉が漢詩を作つたとしたら杜甫の墨を摩するものがあつたであらう。所が大和心と大和言葉に愛着深かりし芭蕉は、その感懐の表現を三十一文字の形式に出でなかつた所を見ると、彼が平常山家集を愛読せしは、西行の和歌その物よりも寧ろ其の人品風格を景仰して居たのかも察せられる。扱て、俳句に於ては、當時談林一派の低調卑辞に飽き足らず、独自一個の見識によりて所謂正風を唱へ出したのであらうが、靜かにその縁りて來るところを考へれば、杜甫の感化與て多きに居ると信する。或は私の臆断かも知れぬが、「古池や蛙飛び込む水の音」なる句を吐く前に、芭蕉の脳中には必らずや「鳥啼山更幽」の詩句が横はつて居たに違ひない。さればとて古池の名吟が此の詩句の翻案なりと云ふのではない。平常暗誦玩味せる詩句が、不

用意の間に躍動して作句を促すことは我等と雖も屢々体験する所である。豫め一定の詩句を前提として意識的に転和を試むるとは異り、偶然或る情景に接したる其の瞬間、平常愛誦せる成句が咄嗟とつさの間に心頭に上り、無意識に転和の句を吐くことあるは古人今人更に変わりはない。芭蕉の古池の吟も亦無意識の転和吟といふて差支ない。牽強附会の詭あらんも、私わがが芭蕉半世の作は杜氏の転和であるといふも此意味に外ならぬ。

大自然の偉觀に打たれ驚魂感嘆の餘り古人の糟粕に想到するのいとし邊なく、立どころに直情実語に訴へた一例としては

荒海や佐渡に横たふ天の川

の如き最も模範的なものであらう。

病雁の夜寒に落ちて旅寝かな

は無論写生の句ではない。此の一句芭蕉の舌端に百転する間に、平生暗誦玩味せし杜甫其他の詩句が幾度か其心頭に出没したことであらう。是れ無意識の転和吟と称して可なるものゝ一である。(23ページへ続く)

子規会報 四一号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 平成元年四月十九日

印刷所 松山市末広町正宗寺内
郵便振替 徳島二一八六八
青柳 堂
松山市東長戸二丁目一三九

松山を代表する

銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町商店街

巴堂本舗

TEL 0899 (41) 3452

会議・御会食をホテル春日園へ
四季の移り変わりを楽しめる露天
岩風呂で一句ひねってみませんか。

政府登録国際観光旅館

春日園

ホテル

〒790 松山市道後鷺谷町3-1
☎(0899) 41-9156



お食事処…かすが…

石畳、格子戸、木の香もかぐわしく
くつろぎのときに情緒ひとしお

(新刊紹介) 江戸初期から大正までの松山を舞台に
たくましく生きた庶民のものがたり。

松山3百年

見たか町衆

上田 雅一 著
B6判 242頁

内容紹介・入魂の罫を描いた「土分返上」／松山騒動の戯
作者内幕の「見たか町衆」／故人の手紙を届ける「遍路飛
脚」／謎の情死現場「徳阿弥池」／亡き人が踊る「除け者大
姉」／人気旅役者「坂東玉三郎」／侍の霊描く「絵馬の系譜」
／ドイツ人俘虜収容所の写真発見／菓子職人の日記

本文大活字・年表・古地図付 価1,500円送250円

オフセット印刷
図書出版

(有)青葉図書

松山市小栗6丁目3-23
☎(0899) 43-1165

いよてつそごうの商品券



「あの方」のお好みに合わせた、スマートな贈りもの。
お酒の好きな方、「趣味は読書」とおっしゃる方……
あの方のライフ・スタイルを考えて、さりげなく贈ります。

500円券から10万円券まで各種ご用意
ご予算にあわせてお選びいただけます

全国のそごうグループ・いよてつそごうの各店でご利用いただけます
《ご用命は》1階商品券売場で承っております



いよてつ
そごう

松山・市駅
☎(0899)48-2111(代)